

カルバリに連れて行かれる人の子

ルカ福音書23:26-32 (新改訳2017訳)

23:26 彼らはイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ、この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。
 23:27 民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな群をなして、イエスの後について行った。
 23:28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。
 23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから。
 23:30 そのとき、人々は山々に向かって『私たちの上に崩れ落ちよ』と言い、丘に向かって『私たちをおおえ』と言い始めます。
 23:31 生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。』
 23:32 ほかに二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。

【祈りながら考えよう】

- (1) 私たちは、27節に出てくる民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れの中の一人ですか。
- (2) 28節で「わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と子どもたちのために泣きなさい」と言われたのはどういう意味ですか。
- (3) 十字架の主イエスと出会うための条件は何ですか。

【解説】

(1) シモンというクレネ人

《彼らはイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ、この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。》

金曜日の午前9時近くのことだった。十字架刑の場所に向かう途中、兵士たちは《シモン》という名の《クレネ人》に《十字架》を運ぶよう命じた。この男のことはあまりわからないが、彼のふたりの息子は後に有名なキリスト者になったようである(マルコ15:21)。

《兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。》

(2) あなたは群衆の中の一人か

《民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな群をなして、イエスの後について行った。》

イエスが他の二人の囚人と共に十字架を負って行かれる時、大勢の民衆がそのあとから付いて行った。

かつて何日か前の日曜日、イエスがエルサレムにろばの子に乗ってお入りになる時に、「ホサナ、ホサナ」と言ってイエスをエルサレムに迎えたあの群衆である。凱旋将軍のようにイエスを迎えた群衆は、今や敗北をもってこの世から追い出されていく惨めな人としてのイエスの姿を見るべく、ついて行く群衆となっている。

十字架につけよ、十字架につけよと、ローマの総督ピラトに詰め寄ったあの群衆である。そして今、そのあとについて行く群衆である。

福音書を読んで来ると、群衆は絶えずイエスを中心として動いている。大歓迎をもって、あるいは驚嘆の心をもって、あるいは憎しみの心となって、様々な姿に変わりつつ、イエスを取り巻く群衆が絶えずあった。私たちがまた群衆の一人なのか、たえずすべての人がどうであろうとも、私はこのように歩むという確かな歩みにおいて歩まされているか。

(3) イエスは弱き者の側に

《民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな群をなして、イエスの後について行った。》

群衆と、もう一つの群れがあった。これは28節でイエスが《エルサレムの娘たち》と呼んでいることでもわかるように、イエスを尊敬していた婦人たちであろう。今、イエスがこのような不当な痛々しい十字架を負わされ、十字架にかかるべくこの道を行かれるのを、見るに見かねて、泣きながらついてきた女たちの群れである。

それは大勢の民衆とは少し質の違った群れである。《嘆き悲しむ女たちが大きな群》とあるように、心からイエスのために悲しみ泣きながら、その痛々しさに胸打たれ、イエスの痛みを感じながらついてきたのであろう。

当時の婦人の地位はまことに弱い低い地位であった。数に入らない存在であった。イエスが5つのパンで五千人を養ったという、あのパンの奇蹟の場合においても、女と子供を除いて、その数五千人とあるが、女は数に入らなかった。

そういう弱みを持つ者、小さい者、そして自らもそれを認めている者、それがイエスの側に立つ者である。イエスはそういう者の側に立って下さる方が、このルカ福音書で証しされている。

イエスはいつでも弱い者、疎外されている者、そういう者の側にあられるお方である。責める者よりも責められる者の側に、イエスに親しくあった者は、このような弱き婦人たち、あるいは取税人、罪人とされた者たちであった。

イエスを慕ってやまない者たち。そういう婦人たちがイエスのあとに泣き悲しみながらついてきたのである。

(4) イエスは振り向いて

《イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。》

この時にはもう、クレネ人シモンが十字架を代わって負っている。イエスのあとについて来る。イエスはよろめきながら、歩いておられる。そして泣きながら、嘆きながらついてくる婦人たちの方に振り向かれた。

エルサレムの女たちは、イエスの痛々しい姿に泣きわめいて、そうしてついて来ている。それはひとえにイエスのために泣く涙である。

しかしイエスは、自分に同情し泣いているその者に向かって言われた、《エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい》

なぜイエスはこのように言われたのか。彼らが泣いているその涙の方向が違うからである。なぜか。イエスは今このような不当な十字架を負って、むち打たれ、けとばされ、ののしられながら、ゴルゴタの丘に引かれて行く。そこで十字架についた。これは何のためか。イエス・キリストご自身のためなのか。そうではない。

イエス自身に対してはこの十字架は毛頭かわりがないことである。イエスは1点の罪なきお方、聖き神の御子である。むしろ人類をさばくお方、人類を罪に定めるお方である。そのお方がこの惨めな残酷な十字架を負うということはどういうことなのか。

それは、イエスのために泣いている、心から嘆いてやまない女たちのため、すべての人々のためである。人間の罪のためである。人間を罪から救うための出来事である。自ら人間の罪に代わってその刑罰を受けようとする姿である。イエスのためではない、すべての人のための出来事である。

だから、この女たちの嘆いてやまないこの嘆きの方向は、全く方向違いだということを、イエスは振り向いてたしなめられたわけである。お前たちの泣く方向が違うぞ。お前たちはわたしのために泣いているが、そうではないのだ。

自分たちの罪のために泣きなさい。わたしが今ここでこのような十字架を負う姿は、お前たちの罪のためではないか。だから、泣くならば自分の罪のために泣くがいい。自分たちの罪と、そして自分たちの子供たちのために泣くがいいと。

(5) 自分の罪のために泣け

ペテロは、イエスを否認するという失敗をした時、初めて自分の弱さを知った。自分がわからない時は、いい気になって強がっていた。まさか私はそんなことはしないと書いていた。しかし、自分の弱さのどん底までイエスに見つめられ、はじめて自分の弱さがわかった。イエスの言われる通りだった。

ペテロは思いきり泣いた。ペテロの激しい泣き叫びはイエスのためではない、自分自身の弱さのため、この罪深さのために泣く、泣き叫びであった。そこから彼の新しい歩みが始まった。

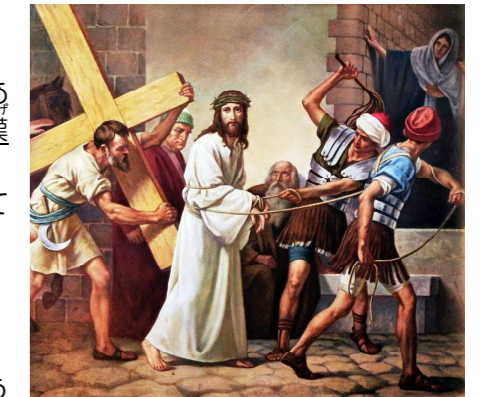
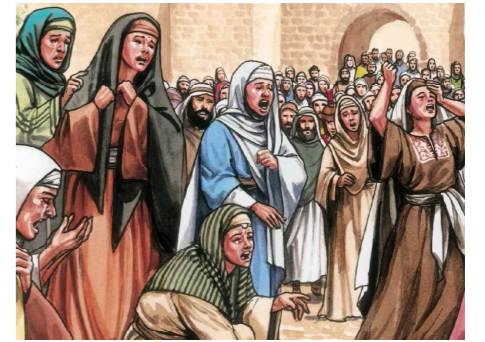
イエスに出会う方向、従って行く方向がそこから始まった。私はあなたとならば獄屋にさえも死にまでもと、それはいかにも立派に従っているようだが、その時はまだ本当に従ってはいなかった。それは単なる肉の力みにすぎなかった。イエスに従うというよりも、自分の自信に従う姿であった。

その時から、弱いそのまま、その弱さを慈愛の目をもって見つめて下さるイエス様に、罪人を救おうとおいでになった唯一の救い主なるイエスに従う歩みが、そこから始まった。

私たちがもうっかりしていると、そのような力んだキリスト者、イエス様に従っているよりも自分の信仰、自分の自信に従っている信者ならざる信者になりやすい。

私たちがイエスに従っていく場所は、自分に破れ果てて泣くしかない、自分の弱さに泣くしかない場である。そこから本当にキリストとの出会いが始まる、イエスに従う歩みが始まる。

今エルサレムの娘たちに、よろめきながらイエスが声をかけておられる。振り向いて呼びかけておられる。それも同じことである。エルサレムの娘たちは、イエスのために泣いている。イエスのみじめさのために心痛んで泣いている。



イエスはその方向違いをたしなめて言われる。

《エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。
むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい》

イエスのこの十字架の出来事が、この身に見るも痛ましい出来事が自分のためだとわかった時、この女たちは自分の罪に泣かざるを得ない。その時はじめて、この十字架を負って悩んでおられるイエスのお心と1つになる。

どんなにイエスのために悲しみ嘆いて、そのあとについて行っても、この女たちはイエスと1つになる時は持てない。

それがイエスではない、自分の罪の出来事となった時、自分の罪のためにただ泣くしかない、そうなった時に、初めてイエスのあとに従う者となる。



(6) まず自分自身

私たちはどうなのか。主イエスが言われるように、自分のために、ただただ心底自分の罪のために、自分のどうしようもない弱さ、破れのために心底から泣く者になっているのか。泣いているのか。そこを経ているのか。それでこそ、私たちはイエスに従って行く者、十字架を共にし、そして主とあの復活の栄光を共にし、永遠なる天の栄光を共にする者となるのである。

この時のエルサレムの女たちの悲しみ嘆きは、いわゆる浅い単なる人道主義の涙である。人間にはそんな涙が、同情の涙、愛の涙のように思える。しかし、イエスの救いは、浅い人道主義によるところのものではない。そんな所から真の救いは決して現れない。

心底から自分自身の内にあるこの人間存在そのものの、どうしようもない罪に泣ける者になってこそ、はじめに、人のためにも泣けるようになる。そうでない涙は、いくら泣いても、結局は空しく流れるだけである。真の悲しみではない。真の嘆きではない。表面がちょっと変われば、それでもう涙は乾いてしまう、そんな涙である。

もしここで、突然ローマ総督の命令が出て、この処罰は取り消しだ、二人の強盗はそのまま予定通り十字架につけられるけれども、イエスは罪なきがゆえに処罰はとりやめ、そういうことになったら、悲しみ嘆いてやまなかった女たちの悲しみは、たちまち手を打って喜び喜びになる。しかし人間の罪は解決されない。人間の心底の悲惨は解決されたのか。否かえてこの罪の解決の道は閉ざされてしまったと言わねばならない。

イエスは言われる、《むしろ自分自身》のためと。あなたがた自身の罪のために、この痛ましいイエスの十字架の出来事が今ここに行われつつあることを悟るがいいと言われた。人間存在の病根、根の根であるこの罪が根こそぎ解決されなければ、真の救いは来ない。そうでなければ、単に腫れ物の表面にバンドエイドをはって、一時的に抑えているにすぎない。

社会が悪い、誰が悪いと、他人事みたいに言ってる間はダメである。そんなことで嘆いては甘すぎる。イエスは言われる、世のために泣くのをやめよ、まず自分自身の罪のために泣けと。

まず自分自身である。子供のために泣いている親があらう。子供のために心を痛め泣いている者があらう。しかしまず子供ではない、自分自身である。自分自身の罪に気づきなさい。自分自身がまず問題である。

(7) 十字架の主と出会う場所

私たちが聖書を読む動機は、この世の問題だったかもしれない。しかし聖書を深く学び、主の御言葉に触れていく時に、他人事ではない、自分自身が問題だと気がついてくる。

子供の問題ばかり思っていたが、その原因は実は私にあるのだ、親なる自分にあるのだと気づいてくる。そして子供のために嘆いていた嘆きは自分の罪のための嘆きとなる。自分の罪に気づいてきた時に、はじめて本当の意味で子供のために泣けるようになる。

イエスは《エルサレムの娘たち》と、呼びかけている。イエスは直接には嘆き悲しんでやまないエルサレムの女たちに、振り返って呼びかけているが、ひいてはエルサレムの娘たち、すなわちエルサレムの市民たち、イスラエル人、ユダヤ人たちに対する言葉である。またさらに、私たちすべての人間に対する言葉である。

他人のために泣くな、自分の罪のために泣けと。その時はじめて、救い主としておいで下さったイエスに出会うのである。

ローマ人への手紙5章6-8節を読むとよく分かる。私たちが自分の罪を知らず、罪と言え、ただ浅い罪しかわからず、自分を善人ぶって、世の罪だ、人の罪だ、世界の罪だ、そんなことばかり言い立てていた時、しかしイエスはこの私のために死んで下さった。この私の罪のために死んで下さったのを知る。

イエスの言葉に接し、私たちの心の底の底まで見通すイエスのまなざしにふれて行く時、他人事ではない、自分自身こそ全く手も足も出ない弱い者だということが本当に分かってきた時、この弱さと罪に泣く者となっていった時に、そこでこの十字架の主と出会うのである。

イエスは私のために来て下さったのだ。私のためにあの痛々しい十字架を負って下さった、そしてあの十字架の上に尊い血を流して下さった。そのことが自分の出来事として受け取れて来る。

(8) 私たちは罪に泣く者の群れ

他人の罪を考えている間はダメである。聖書が説かれても、単なる人道的な出来事としてしか読めない。聖書はそんな浅いものではない。そんな読み方をしているのでは、救われない。

キリスト教会は今日、そうした浅いものに、すり替えられつつある。人間の罪を説かなくなってきた。ただ社会悪だ、世界悪だ、そうした方向に罪の問題が向けられていく。肝心の自分自身のことは留守になってしまう。

イエスが振り向いて言われた言葉は、まさに現代の教会に対して言っておられる言葉ではないか。人間の罪のどん底から救いうるこの事実を伝える者は、自分の罪のために泣きに泣いた者しかいない。それが真のキリスト者である。

(9) 恐るべき時が来る預言

ただ嘆いていて救われるのではない。自分の罪に泣き悲しんで、そこでキリストの救いの事実を受け取って喜び、感謝し、賛美する者となるのである。

《『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから》

これはすでに21章20-24節においてイエスが預言されている所である。

《しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。

そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちはそこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都に入ってははいけません。書かれていることがすべて成就する、報復の日々だからです。

それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。》

イエスの預言の言葉がここにある。紀元70年、ローマの大軍はこのエルサレムに攻め寄せ、取り囲み、エルサレムは完全に敗北し、廃墟と化してしまった。

その時そのエルサレムの中であって、どういう悲惨なことが起こったか。それは歴史家ヨセファスの「ユダヤ戦記」という本の中に記されている。

当時のユダヤの社会においては、女として子を産めないということは、恥ずかしい、不幸な事であった。しかしその不幸な出来事が幸せなことになる時が来るのだと言われている。子供を持ち、子供に乳をふくませる、それはまことに幸せな姿である。女として誉れある姿である。しかしそれが嘆きと変わる時が来る。

その時、子供を持っている者は、子供を持つがゆえに、ひたすらに逃げる事ができない。自分もわが子も破滅するという結果に至る。身1つで逃げられる者は幸いだというのである。

《そのとき、人々は山々に向かって『私たちの上に崩れ落ちよ』と言い、丘に向かって『私たちをおおえ』と言い始めます。》

これは預言者ホセアの言葉の実現である。ホセア書10章8節にある。あまりの悲惨な出来事のゆえに、山に向かって、どうか我々の上に倒れかかってくれ、そして私をおおってくれ、と言わざるを得ない。

そこでもし山に押し潰され、丘の下敷きになって押し潰されたとしても、この恐ろしいことから逃れられれば幸いだという、そういうまことに恐るべき時が来る。

(10) 罪を認めない者に下る大審判の警告

《生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。》

生木はイエス様ご自身、神の子である。永遠の神の御子の命を持っておられるお方が、今このような悲惨な姿で苦しんでいる。そうならば、命を持たない者たち、罪のままである者たちは枯れ木である。そのような者はどういうことになるだろう。どんな恐ろしいことになるだろうか、という警告である。

わたしのために泣くのではない、自分たちのために泣くべきだ。このような恐ろしい運命を持っている自分たちのために泣けとイエスは言われる。

また、自分の罪を知って、イエス様に真の救いを見だし、イエスにあって新しい永遠の命をいただいた者は、まさに生木である。だからどんなに迫害を受けようと、どんなに世にあって苦しみを受けようとも、我らの内には命がある。決して滅び去ることはない。

しかしキリストを信じないで、自分の罪を認めないで、浅い解釈を求めて自分のために泣くことを知らない者は、いわゆる命のない枯れ木である。

やがてどんなことが臨むか、命を持つ者でさえ苦しみを受けるなら、命のない者に下る神の大審判はどんなに恐ろしいものであるか。泣く涙は他人事ではない。自分のために泣かねばならない。そうでないと、いくら泣いても取り返しのつかない時が来る。

イエスが言われた通りに、エルサレムに対して、紀元70年のあの滅亡が実現したように、やがて歴史の終末において、この世界の終末において、イエスが警告しておられることが実現する。この世界がいつまでも続くと思ったら大間違いである。この世界は、この歴史は、まさに終わりに向かって急速に進みつつある。

(11) ほかに二人の犯罪人が引かれて行った

《ほかに二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。》

《ほかに二人の犯罪人》が、イエスとともに処刑されるために、この行列に加えられていた。